

病理診断科

1. 組織診 6,778 件(前年比 95%)、迅速診断 489 件(前年比 108%)、細胞診 16,946 件(前年比 129%、うち予防検診センター 11,137 件)、病理解剖 20 件(前年比 56%)であった。常勤病理医 2 名(うち病理専門医 2 名、細胞診専門医 1 名)、非常勤病理医 3 名、非常勤病理コンサルタント 1 名、臨床検査技師 6 名(うち細胞検査士 4 名)、写真技師(兼任) 2 名で対応した。
2. 組織診のうち診断が困難であった 18 症例については専門病理医にコンサルトし、正しい病理組織診断のもとで適切な治療が行われるように努めた。院外コンサルト症例の内訳は、リンパ節 7 例、縦隔 3 例、肺 2 例、消化管 1 例、唾液腺 1 例、鼻腔 1 例、乳腺 1 例、骨 1 例、軟部 1 例であった。院外から当科へのコンサルト症例は 8 例(婦人科腫瘍症例)であった。
3. 病理診断において診断確定のための免疫染色の重要性が高くなっている。当科では 1 年間に 976 症例(全症例の 14.4%、前年比 119%)で免疫染色を施行した(染色回数 219 回)。
4. 症例検討会は CPC 6 回(各回 2 症例)、消化管生検検討会 17 回、腎生検検討会 12 回、骨髄生検検討会 8 回、研修医のための病理勉強会 5 回が開催された。
5. 初期研修医 1 名が 2.5 ヶ月間の病理研修をおこなった。
6. 2007 年に導入したバーチャルスライドシステム(NanoZoomer Digital Pathology)は、悪性腫瘍症例の保存、借用標本の保存、院外コンサルテーションの補助、症例検討会、臨床医向けのサービス(フォトセンターへの依頼 70 件、975 枚)に活用した。
7. 2002 年から病理肉眼標本のデジタル撮影を開始し、丸 8 年となった。1 年間に 13,039

カット(前年比 119%)が撮影され、データ量は 76.4GB(前年比 121%)であった。すべて高品質のデータ(RAW)として保存され、電子カルテでの参照、学会発表、論文作成に活用されている。また過去に撮影された肉眼標本写真(35mm スライド)のデジタル化を進めた(手術例 1997 年から 2001 年まで)。

8. 2010 年度も精度管理の充実に努め、患者さんに損をさせない病理診断を目指したい。
(部長 小川 博)

- ・医師数 2 名 ・後期研修医 0 名
- ・初期研修医 0 名 ・合計 2 名

(2010 年 4 月現在)